

# 牛久：学校周辺に見る自然

第11号 ひたち野うしく小学校

2018年5月20日発行

## ＜ 春のみずべ公園で生きもの観察 ～⑦その他の昆虫とトカゲ＞

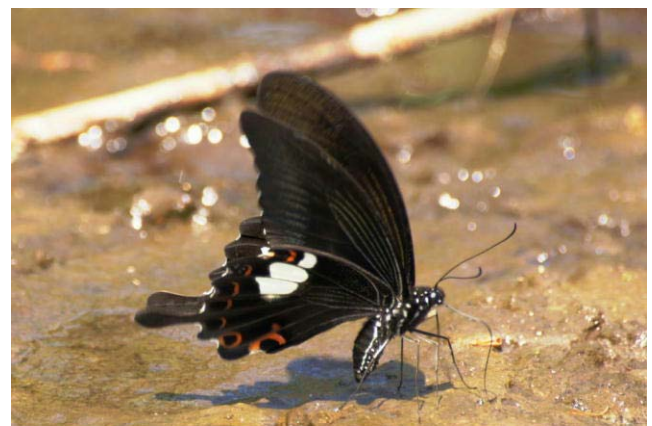
ひたち野うしく小4年生と歩いたみずべ公園、今回は、花以外で見つけた昆虫とトカゲを紹介します。



はねを開くときれいな薄青色のもようが見えるが(左上)、閉じると樹皮と同じ茶色つばい色で目立たず(右上)、ちょっと離れるとどこにいるのか分からなくなる(下)。

まずは、チョウの仲間であるリタテハ。はねを閉じると、樹皮と同じ色になって見失ってしまいます。飛ぶスピードも速いのですが、また元の場所にもどってくることが多いので、目で追いかけるが少し待ってみましょう。ところでチョウも昆虫ですが、足は何本？「6本に決まっているじゃん」と聞こえてきそうですが、右上の写真をよく見て下さい。「あれっ、4本？」じつはタテハチョウ科のなかまでは、前足2本が退化し短く折りたたまれて4本のように見えているのです。もちろんこの足でつかまえることはできませんが、そのかわり味を感じることができ、エサの葉や幼虫を感じることができるそうです。

続いてミヤマセセリ。セセリチョウ科の仲間、茨城県南では珍しくなっていました。2～5組さんの時には、泥水を吸っているモンキアゲハがいましたね。蜜ではなく、水分とミネラルを補給していたのですが、なんと前半のクラスが到着したときから、後半のクラスが帰るときまで3時間以上も吸い続けていました。



落ち葉に似た色で見つけにくいミヤマセセリ(左)と、泥水を吸って水分とミネラルを補給するモンキアゲハ(右下)。





どろみず 泥水を吸うコガタズメバチ(左上)と、ルリイロナガハナアブを襲うクロヤマアリ(右上)。ハナアブの仲間、ヒラタアブ類のさなぎ(下)。

モンキアゲハの近くで、やはりどろみず泥水を吸っているコガタズメバチがいました。こちらは、あまり長い時間はいないで、20分程度で飛んでいったようです。

低い草の中を動くものがあり、よく見ると、ルリイロナガハナアブという黒っぽいハナアブが5、6ひきのクロヤマアリに襲われているところでした。みんな、生きるのに一生懸命です。

ハナアブといえば、ヒラタアブ類のさなぎも見つけてくれましたね。とても小さく見つけにくいのですが、おおぜいで探すと見つかるものですね。写真下側が頭です。それにしても、よく見つけました。



ナナホシテントウ(左)とナミテントウ(中)、ヤマトアザミテントウ?(右)。

テントウムシも、いろいろな種類が見られました。



アジアイトトンボも、めすが小さな虫をつかまえ食べているのが見られました。トンボは、幼虫のヤゴも成虫も肉食なので、成虫の場合はハエなど飛んでいる虫をつかまえることが多いようで、以前、シオカラトンボが大きなサトキマダラヒカゲというチョウをつかまえて食べているのを見ました。

飛びながら小さな虫をつかまえて、食べるアジアイトトンボのめす。





両わきが針のように突き出たハリカメムシ(左上)、全身赤いアカサシガメ(右上)、桜の幹に集まっていたヨコヅナサシガメ(下)。

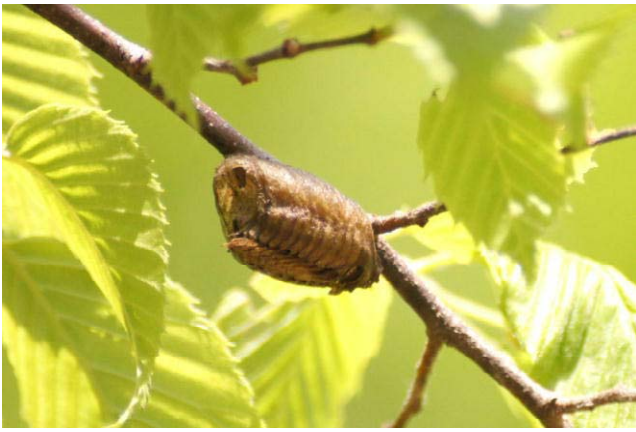
次に、カメムシの仲間。生きものの名前はその特徴からつけられることが多いですが、ハリカメムシは、胸部の両わきが針のように突き出ています。アカサシガメは3年生も学校裏で見つけましたが(第3号)、全身真っ赤。1組さんの観察が終わって集合したときには、ヨコヅナサシガメが集まっていた。幹のくぼみや樹木プレートの裏などで幼虫がかたまって冬をこします(26年度第2号など多数)。腹部にある白黒のしま模様を、横綱の「化粧まわし」に見立ててつけた名だそう。幼虫は赤と黒が目立ちますが、写真上部の全身が赤いのは、脱皮したてのものです。カメムシの多くは植物の茎の汁などを吸いますが、サシガメの仲間は昆虫の体液を吸って育ちます。ひどいと思うかもしれませんが、桜の木にとっては葉を食べる害虫を食べて増えすぎるのをおさえてくれる、ありがたい虫なのです。



ミミズの死体を食べるオオヒラタシテムシ(左)と、シモフリコメツキのなかま(右)。

こちら、ありがたい昆虫。オオヒラタシテムシです。ミミズの死体を食べていました。気持ち悪いと思うかもしれませんが、これらの虫がいなくなったら、みずべ公園は動物の死体だらけになって悪い病気も広がってしまうかもしれません。ヒトも含めいろいろな生きものが、お互いにつながり合ってバランスがとれているのです。右はコメツキムシの仲間。特徴ある形ですね。





ハラビロカマキリの卵らんのうう(左上)と、エゴツルクビオトシブミのゆりかごかご(右上)、クヌギハケタマバチによる虫こぶこぶクヌギハナカイメンフシフシ(左下)、ソロメフクレダニによる虫こぶこぶイヌシデメフクレフシフシ(右下)。

枝えだを見上げると、ハラビロカマキリの卵らんのううがついていました。ふだん木の上で暮らくしていて、樹液じゆえきや花、果実に来るチョウなどの昆虫こんちゆうをつかまえて食べるようです。

エゴノキでは、葉が切れて丸まりぶら下がっているのがいくつも見られましたね。これはエゴツルクビオトシブミのゆりかごで、中には卵たまごがひとつ入っています。ふ化かすると幼虫ようちゆうは、その葉を食べて育ちます。5/17の3年2・4組の観察の時には成虫せいちゆうも見られたので、後日報告したいと思います。

その他、虫こぶ2種類。丸い大きなどんぐりのなるクヌギの枝には、クヌギハナカイメンフシがたくさんついていました。同じものが校庭こうていのクヌギにもありますが(第4号)、クヌギハケタマバチがおすの花たまごに卵うを産みつけてできる虫こぶで、6月ころに羽化うして今度は葉の裏はに産卵うらんするそうです。イヌシデえだの枝には、ソロメフクレダニが冬芽ふゆめに産卵さんらんしてできるイヌシデメフクレフシがついていました。仲間なかまのアカシデには別の虫こぶができるので、虫こぶから木の種類しゆるいを見分けることもできます。



最後にニホントカゲ。みずべ公園にはカナヘビもトカゲもいますが、トカゲはカナヘビとちがいで土の中にもぐるからでしょうか、観察の授業ではカナヘビの方がよく見つかりますね。そのほかにもいろいろなちがいがあります。

図書館の本などで調べてみませんか？ 【理科支援員：宮内】

手のひらにのせて見せてくれた、ニホントカゲ。